

インド人との個人的接触記

吉田 真人

世界最大の人口を擁し、GDPでも近々の世界第3位を窺うインド。ロシア産原油を買い続け、結果的にプーチン応援団となっている。残念ながら行ったことはないが、インド人は幾つかの個人的接触があった。

最後の職場となった米社とのJVで、システムをオラクルへ変更することとなった。が、なかなかうまく行かない。米国本社に応援を頼むと、やってきたのが3名のインド人。工場見学について行き、管理職を集めてミーティング。まず簡単な自己紹介を、と依頼したが、これが一向に終わらない。放っておくと数時間は喋り続ける勢いだ。現在までの実績や今後の抱負等々、自己PRに余念がない。結局3人で1時間に迫る勢い、抑えるのに一苦労。謙譲の美德という言葉からは無縁で、激しい競争社会を目の当たりにした。

米国ミシガン州の対岸のカナダに、合成樹脂プラントを建設する企画を立てたことがある。カナダの石油大手N社に隣接し、同社から原料と用役の供給を受ける。同社の本件担当はインド系だった。極めて優秀で、何を聞いても立て板で答え、また上層部や関連部署への根回しも怠りない。計画は順調に進んだが、最後の段階で当方側が待ったを掛け、中止となった。カナダの企業の中で、優秀なインド系が重要な役割を果たしていることが強く印象に残った。

40年近く前のロンドン駐在時代に、秘書を募集した。面接に来た何人かのうちの一人がインド系であった。彼女は生れと育ちがケニアで高校から英国に来たとのことで、非常に判りやすい教科書的英語を話した。日本の会社にインド系の秘書というのも坐りが良くないと考え、採用しなかったが、国際都市ロンドンを実感した。

後刻、英国でリシ・スナクが首相に就任した。初めての非白人且つヒンズー教徒の首相である。総人口6800万人のうち、約2・5%を占めるに過ぎないインド系から首相を輩出したわけで、英国社会の多様性への寛容さと、インド系の人々の努力と上昇志向が窺える。

(2025年9月18日)